



~13  
3919  
1

門 へ 13  
號 3919  
卷 1

三

僕の家は隆徳は梅は忠信は人ほしく人の子と教ゆるに



右の語よりとと波海へてりくら守ぬ僕も初程  
とて人に物説とすまへまき一日小栗助重ととと抱り

志はるよ其まといと情ふれくすもわるとれう書は者

せげとも好反古ともも破獲為れ序は埋とたきくと

今年書射裏星岡のゆるくこれと関く梓と彫人とら僕

のふ前よ小栗実記と書はりて世にゆれしは書は隆徳の

井さねと人と導んふめにと程どとまぶ鄙びぬる云りて

詔<sup>ミコトノミコト</sup>遣<sup>ツカ</sup>しととらふに書<sup>カキ</sup>ほけは後<sup>ノチ</sup>のこしと公<sup>キミ</sup>よせん  
り隣<sup>ナリ</sup>翁<sup>ウラハシ</sup>の鬼<sup>オニ</sup>加<sup>カ</sup>はとあつ<sup>ツ</sup>く僕<sup>僕</sup>と責<sup>ツク</sup>行<sup>ユク</sup>の辞<sup>ハジメ</sup>わくむや  
書<sup>カキ</sup>群<sup>グン</sup>しら笑<sup>ウツ</sup>ひは秋<sup>アキ</sup>國<sup>クニ</sup>唐<sup>タウ</sup>國<sup>クニ</sup>乃<sup>ナリ</sup>古<sup>コ</sup>まきまをうらむとほら  
のあまきとほらまをえとてへ後<sup>ノチ</sup>どえとむきよとてあつ<sup>ツ</sup>く  
ひがとがま<sup>マ</sup>と賢<sup>サトウ</sup>ま<sup>マ</sup>を宣<sup>ノボ</sup>へまはしむるはな多<sup>タ</sup>くよ耳<sup>ミミ</sup>  
らり公<sup>キミ</sup>と中<sup>ナカ</sup>に古<sup>コ</sup>唐<sup>タウ</sup>國<sup>クニ</sup>の賢<sup>サトウ</sup>ま<sup>マ</sup>は六<sup>ム</sup>周<sup>シウ</sup>卷<sup>クワン</sup>の風<sup>フウ</sup>信<sup>シン</sup>さす  
わるとと志<sup>シ</sup>清<sup>セイ</sup>く免<sup>メ</sup>く改<sup>カ</sup>乃<sup>ナリ</sup>こまけに志<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>くと稗<sup>ハ</sup>官<sup>クワン</sup>よ  
余<sup>ヨ</sup>て小説<sup>シヤウゼツ</sup>とほくしとるま今<sup>イマ</sup>け書<sup>カキ</sup>も彼<sup>カ</sup>小説<sup>シヤウゼツ</sup>よ重<sup>オモシ</sup>重<sup>オモシ</sup>き

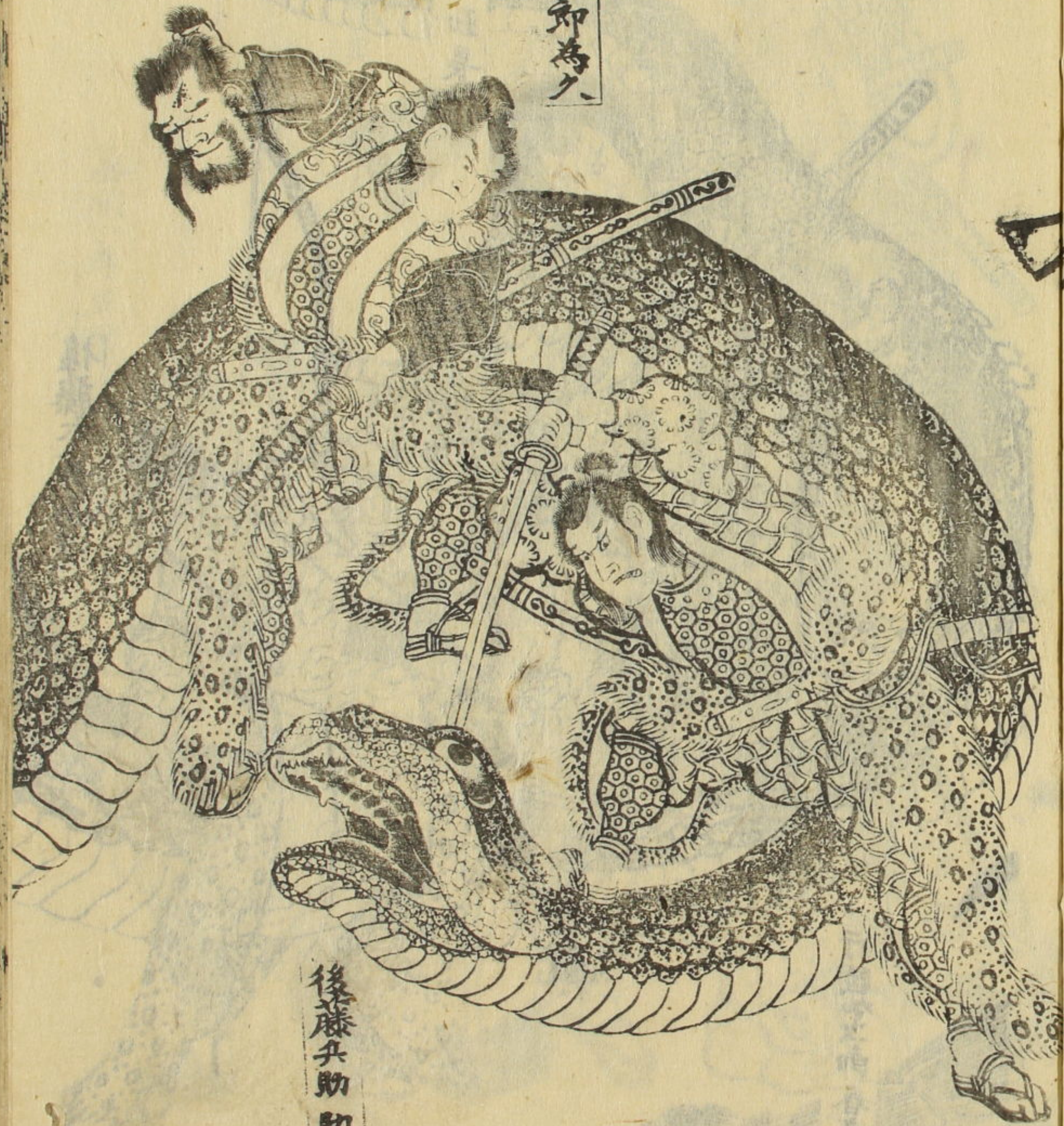
これとわくは後<sup>ノチ</sup>の世<sup>ヨ</sup>教<sup>キョウ</sup>乃<sup>ナリ</sup>後<sup>ノチ</sup>とけりおきよくとわくす  
隣<sup>ナリ</sup>翁<sup>ウラハシ</sup>の鬼<sup>オニ</sup>と後<sup>ノチ</sup>とわくはな多<sup>タ</sup>くと受<sup>ウケ</sup>わくまを  
いそ後<sup>ノチ</sup>とまをらせとせらよむらむに辞<sup>ハジメ</sup>むを  
すれをほよ書<sup>カキ</sup>群<sup>グン</sup>よらぬとほらぬ

文化十卷西正月

峰山人 歎齋詩頁



義登小太郎為久



後藤兵助助高

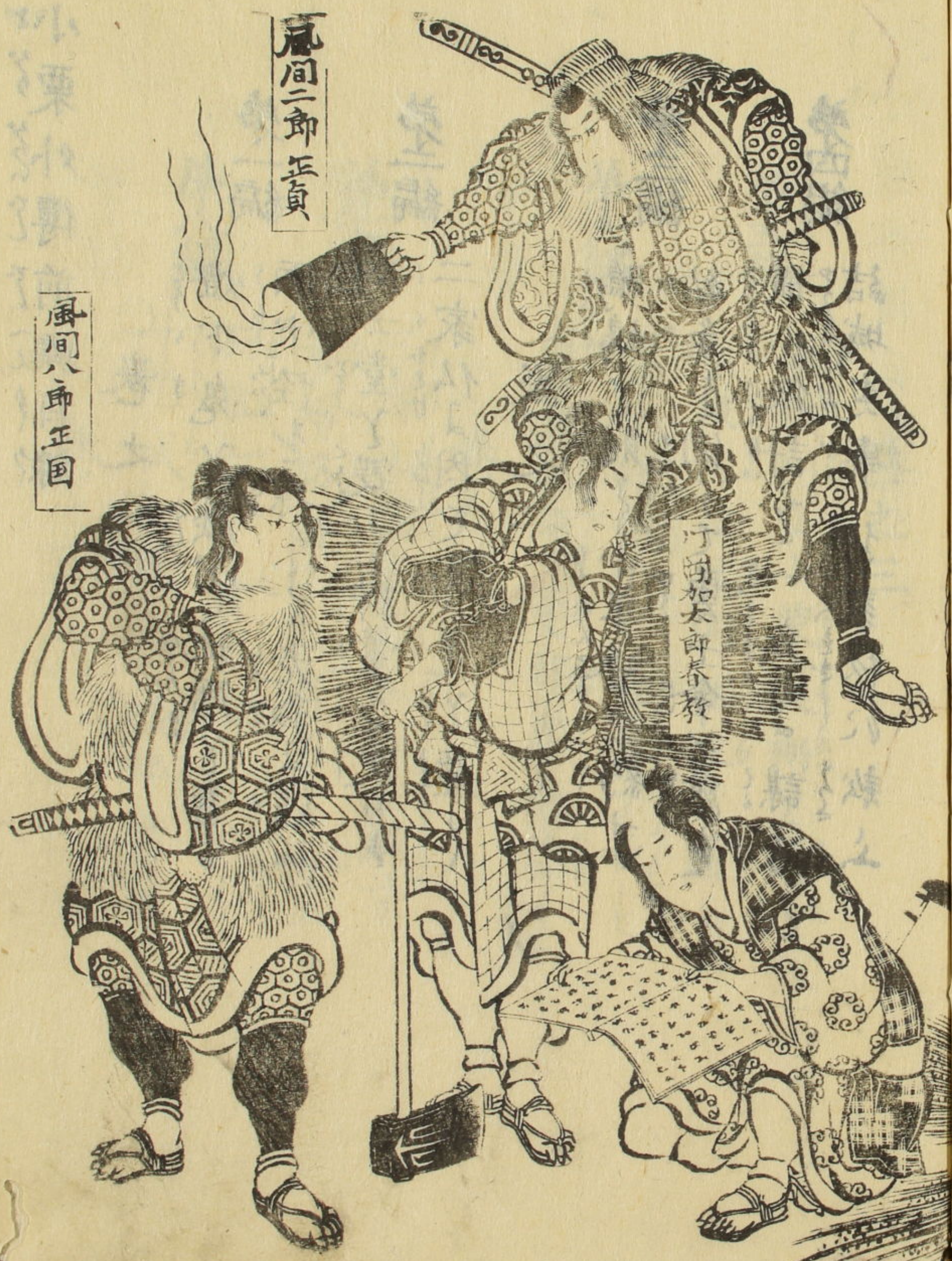
下栗判官代助重



田邊平八郎長為

田邊平八郎長秀

照天姫



風間三郎正貞

風間八郎正国

河内如太郎春教



池田司助長

後藤六郎高次

河内如次郎春高

小栗外傳前編目録

○卷之一

第一編

燈下鬼と談じて地所と看る  
兩中怪を探して老翁と遭ふ  
兩士堂と毀く神靈を走らし  
二家仏と因て奇児と産く

第二編

○卷之二

第三編

鳴鳩と射く小羊婚を約す  
鮎魚を網して勇士命と落す  
横山伎計と一色と謀る  
結城実事を家板に託ふ

第四編

○卷之三

第五編

藤代川と小栗良弼と得る  
築波山に風間明主と遭ふ  
孝子耕田と孝義と表す  
勇士山獵して邪惡を除く

第六編

○卷之四

第七編

三傑山獵して兩害を退す  
毒婦譏毀して孝子と遂す  
西雄市と得て因縁全く  
一老城に死して後邪誘れ

第八編

○卷之五

第九編

貞婦夫婚と待く節と全き  
良馬名士と遭ふて能を顯す

○卷之六

第十編

弄妓哥と唄ふく蜜計と諭も  
老僧因を説て未前を示す

第十一編

妬姫欲と違ふく二娘と宿も  
義婦身を殺して女主を救ふ

以上十一編前編六卷

小栗外傳目錄終

寒燈夜話 小栗外傳卷之一

東都 絳山歎酬陳人戲編

第一編

燈下鬼と淡く地雁と着る  
兩中怪と探して老翁と遭ふ

豆利三郎氏公元弘の功ありて衝く再昇進し從二位の系議并補任し。  
征夷大將軍の宣旨と蒙り関八州と管領し相州鎌倉に居て一々其  
一族新田我身と確執の事ありし夫よりして南北と朝多れ天下二つと氣  
軍文小止耐はこにあらて尊氏公の嫡男義経公と共つて北朝の帝に  
守護のくえ上治あり。山二男基氏公にて鎌倉を止て後領と志くまひき  
基氏公性質賢才よく武と内はこれ外も行ひ多し東國の供侍其  
徳を伏し関東諱濫治り多されは足より基氏公の御後代鎌倉の主

とのなる終ふ基氏より三代が左兵衛佐満兼公と申れ此公十八文にして  
 箕の求と嗣まひとれと父祖の徳と執事家一枚一家の忠ふよめて其職を保ト  
 るひと満兼公いふも年將おむとわが平生志どかたは戦の多うり  
 一色式部少輔詮秀といふのありてこれ足利累世の臣なるが近習の頭人  
 ありありなり此詮秀が為人奸佞邪智にして飽きて貪欲ふく賢と妬と愚と  
 濁子不仁不義の行の多うりされと近臣の改くをりて其威を懼ととの  
 非と怨むるのめは小人のさうい詮秀おれが持威ふり我も足利家  
 譜代の臣ながら家枚の人と及ぶは居るといと念の事いあをさ  
 執るとさういふの事と只願満兼公も媚阿折めあれて六家枚と初められ  
 増る人とと満兼君臣の間と疎くせんともうりは然るふ今年應永六  
 年よりりねが夏の頃よりと後倉中夜く光物飛行とるは口頃とるは

季秋の上旬はくこちけききさるる霖雨も鏡倉大將が谷の場所  
 少の復願満兼公は然も堪多うと近臣の輩と揚言なんがの  
 戯れ白益はほぎれ人も夜のながれぬいこく俺とそおやし  
 ちり一夜一色詮秀當直なりし君のは光景を着る付と怪れ  
 昔物語とけ加ええりのととそらことまごてははまほしていこめ  
 悲しげも物語りふおももど夜の更ふり此村の座の上よさと物音して  
 此縁の障子明らからうもえんくつねが忽ち暗くありてまご音もほ君  
 ぞとえんく怪れぬ詮秀はそらまきりりね人くさこの怪異を  
 知りあふとやこれ近日人の風声も光物と七親音が谷と佐  
 女が谷の間より出るとさうれどもさうおんを知らぬのほし今この怪物の  
 実否とえ極むるのめは天晴剛者さう人くさうかめとくと別



ありのの詮秀が志すのがほたるを思と臆とれりの先刺りの怪泣  
 びまふ只今日希光物とてつりし心おくれとて誰のりて詮秀  
 が河を回意りのほ詮秀己が云かけられこの回意りのなれぬ  
 こころて面目を失ひしは満意を小對してしけるは先祖頼光公乃  
 是射一校の所伽不羅生門に鬼住しや者ありしは波迎の綱を命せ  
 鬼神と討めりしきされば今の世の童子までその勳功のちかかきり  
 侍て賞しひ君へ正しくその心子強てこころせまふ小結去國八列  
 小奥羽まぐ管領とあるは光公の位も富も通もたつりくむじ  
 ろがらつづらぬ物とてえとくをたれ人なれはいつくは後世を  
 びすて武勇の少なきいと浅様たるゆゑと心のしつなきやあやまり  
 是若年の満兼公の氣をいふ波がや処至極せり我不肖なりとい

ども箕原の業を嗣いで関東の愛領より其在住する徳念は妖怪  
 わるごと武威なれし似たり斯ていいて八列を制する任に誰ある急れ  
 佐と女が谷小走向ひ妖怪の冥否とて届すはと宣つて何れ下より  
 某今の仰成業とてやといふのあり諸人泣きとて不総前なる  
 兵藤少年の存の側よりをこ出たり是下野國結城の城至七を  
 氏朝が嫡子六郎持朝といふ者あり満兼公かきりけりはひのい汝も  
 中乞けりのなさをとく彼亦とあれよと命とる小持朝仰せ承けり  
 さりながら佐と女が谷小系りゆてもり妖怪のあつて空しく歸り  
 ゆらんおの後日彼是と人のやさんをも念ふは何すれ物賜りて彼亦止  
 せられまりの験みなりしきとてとて實道深くさふはこれるん説小  
 まぐと持まふの扇と賜ひられは持朝をひ小臣古の綱小似たりとい

あふ孫と此の肩こそ古の令れあてなること勇まきしてはあを退出日頃  
 飼馴し馬おうち糸供をも連を只一人依り女が谷へと急心なる頃ハ季秋  
 初旬なる夜も文圍しとなれば天丹月の光なく雨さ入りしり出く  
 忍尺も糸ぬ黑夜と松明を照して路の草踏まきんたどり行き駒乃  
 手綱をかひくれハ響虫と音をかじし尾尾花とおく又けの幸ふとて御  
 お佐と女が火々お到されハ馬より下て四方と徘徊とされどもおやうりり  
 えまのしるふさそ根はしとを云ふもこそさるもても紛りし扇状を何方お  
 止めを入りと四方と回顧とお軒傾と柱かみりる堂ありこれハ入社屋  
 こそわれと其堂お入松明と照してこの圓通といふ額ありこの祝言  
 と安置する堂かこそと中て扇と仏檀の糸居居首と祈るハ糸君の  
 命あり此地ハ妖怪と云ふ人なる来りけるも些の怪又と云と斯てハ

君も女へあぐき何は此地方ハ妖怪ありと実果少のりハ海がりハ  
 我もえさし多とあばく念を居れとさうりハ怪異ハ此地方ハ鎌倉  
 の中なるも斤山陰の邊地中て古樹生茂て鬼穴と穿ち狐跡ハ  
 印も外人跡絶するあるに時ハ三更の比及て風雨梢と鳴きこの  
 寂として物音は尋常のりなりせむいづ此まへも人き持朝年  
 りろ冠さるふ至とざれと天性の勇めれば少も恐懼せと前ハ只  
 一人観音堂より居て只顧怪異ハ遭てを念がけと絶く物次  
 えざれば君ももさそを待らびもらんしむらり還らむと轡おひは  
 馬牽はし既に乗らんとする時ハ忽然として八十とるとあがりハ藤の  
 石ハ黎の杖と撫たふ水晶の数珠とけぬり観音堂のまも現られ出  
 たりハ朝これと着りりさてこそ妖怪とさめれと雀踊り討んと



結城持朝

神翁



佐々木谷持朝  
神翁  
造

とくみよりのしが。さてふんじ此翁有り大願のつて。諸ふあつる者はしものふらば  
不便のふなり。人々鬼うごころをよと公祖が側近く進ま寄れば公祖はえ示  
としてえりたる足下はまご総角の才をりて。深夜小あふび此幽陰の  
地也。却りの括くはるこの勇まはよ。そもいらる人あてころごとくせ  
うわとりのちるふ。折胡の彼とこそ同んとあひまや。我方のう人を同じこの  
と。眩まころがら。其の今夜君の命を奪て此地方小あふらりの公祖は  
こそ幸ならん。近頃此地方小あ怪あふは。其つ々へありの。り。知るふのらば  
語りぬと。えりければ翁はちあり。此霊場ふあふて。いうて妖怪乃  
あづまや。足下はけ祝者の履歴と知るであらはん。そもく此觀世立目の  
當初後光嚴院の御時延文四年。新田左兵衛佐我貞武洲矢口の津  
小あかて。井沢監物の為討とに。其霊東国小崇り。そくれ怪異あり

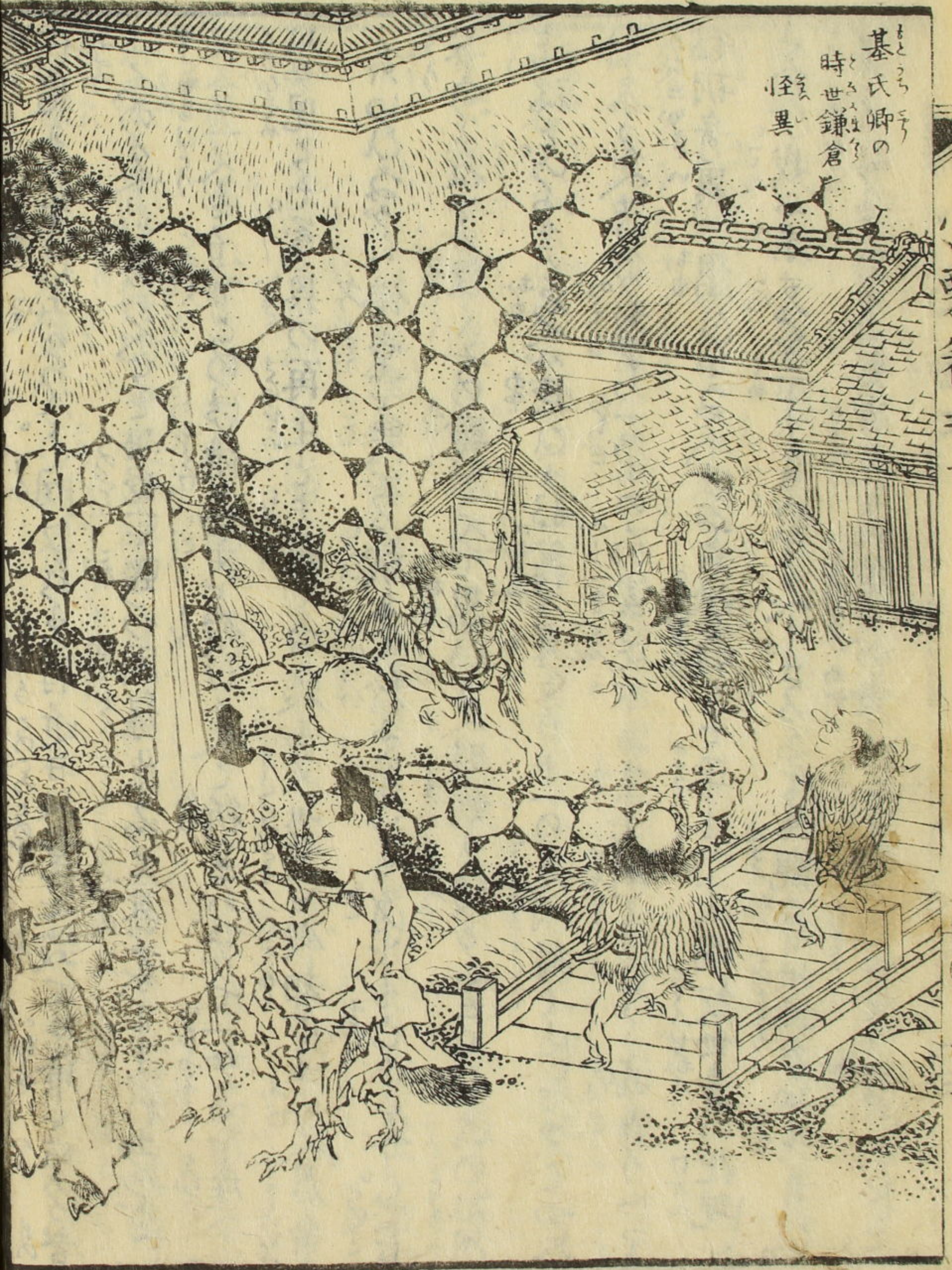
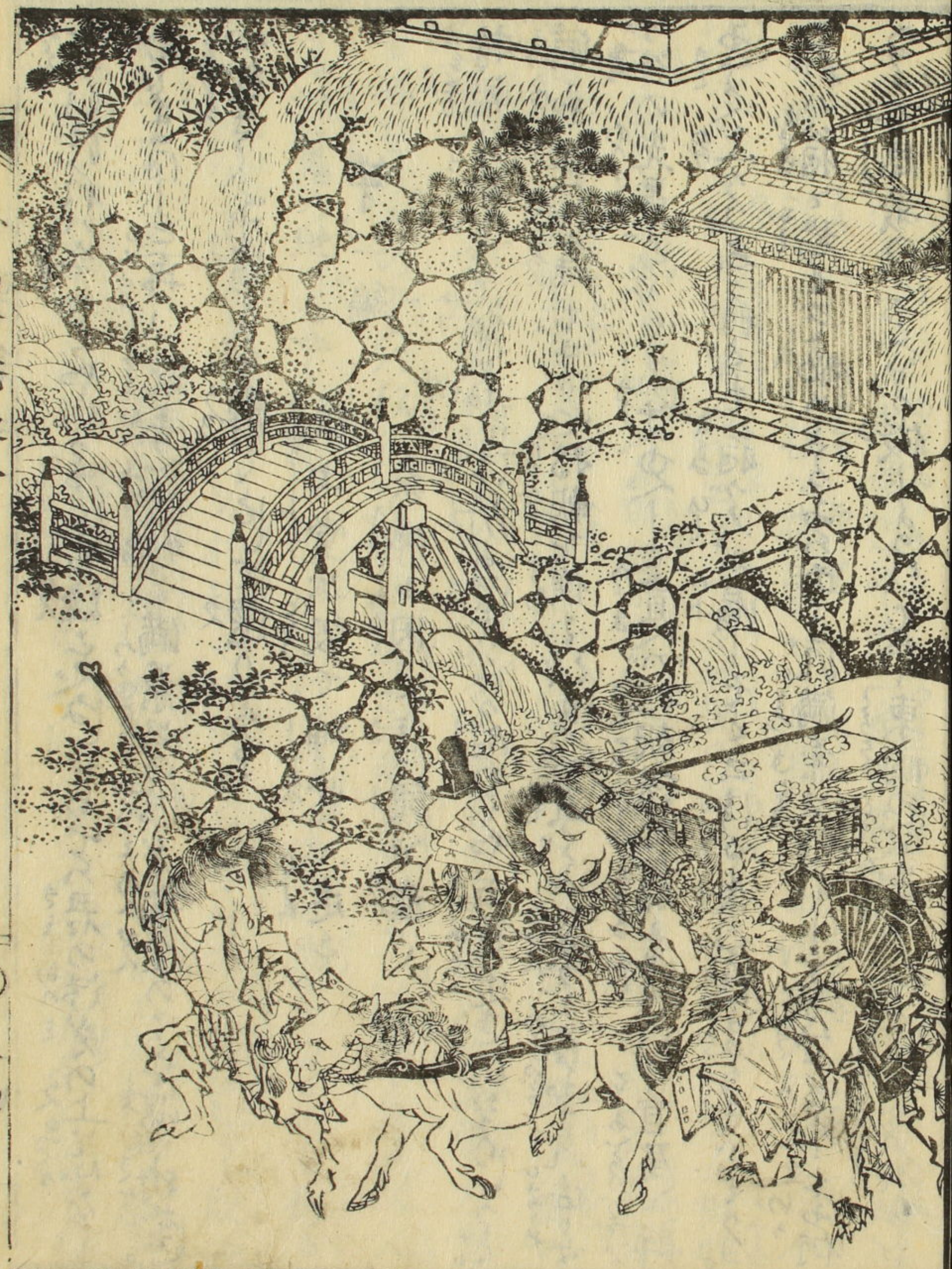
けらろろ小極念管願の鼓おあひて。毎深夜文小及び厨の内。人住あり  
語り笑ふ。既あふて明燈を挑げ。饌を調へ食を見。飲食の音あふ番土  
の等怪そて厨の戸を開き。視るふ。さくふ人あは。戸を関われ。又えの  
おら。人の声まを。これ窮性録に載を嵐の怪あり。そののころふに。  
徳倉中の寺社故なくして。表表ゆご。堂倒ろく。と少く。或は白日  
空中小矢叫ひの音あへ。黒夜街上小童謡の声あり。その外さく。く  
の怪異あり。人民安さ。至善る。に。關東一圓小瘟疫さるん  
少流行死亡さる。の多し。く。あふて。基氏公あれを患ひ。刑罰と  
新く稅賦と。善く。大赦を行ひ。尚東國の宮觀寺院小傘。せて靈法  
秘法を。徳せ。れ。う。と。さ。ら。小天災地大止さる。り。其頃相州藤沢山  
小光院清淨寺の住侶。波報上人と。ま。下。へ。岡山一遍上人より八世小

當りし松行上人あり。道徳いとまろふとかりし。基氏公執る家枚憲顯  
と議り。彼松上人と清し。天災を禳へき修法を乞ふれば。上人の嘆と。基氏  
公の民を憐む志意の行と感す。一七日の間秘法を修し。自ら十一面觀音の  
像を彫刻して。是の夜無と。十人の從臣と。十一の靈と結ん爲る。かくその  
る像が此佐と。谷の安置せし。さうも。勵りかりし瘟疫は止。隱念  
中の怪異もあつた。形もなり。其後。鎌倉の静謐は治り。今此後。領  
小至るまで。連綿として其職を安んぜり。是ひと。小此十一面觀音の眞助。小  
よりのあり。然る。今年。滿兼公。出家督あつて。世を新す。ふなり。ね。され。ば  
天運も革。新ふ。けれ。多く。此邪氣。効る。よ。て。此觀音。菩薩。其。妖魔  
の氣を驅。多。り。と。夜。毎。隱。念。中。に。花。行。し。多。く。受。く。妖。怪。の。亦。新。ふ  
何と。ぼ。と。い。と。ま。く。ち。物。語。を。れ。ば。持。初。を。り。て。此。十。一。面。觀。音。を。此。比。よ。失。

置を縁故を知り。この公。羽凡人。再あつじ。と。あり。ひ。よ。尚。此。後。の。世。の。光。景。と  
関人と。れ。を。恭。して。云。り。り。不。因。も。公。羽。の。示。す。あ。あ。よ。り。此。觀。音  
菩薩の。こ。に。安。重。さ。る。縁。故。と。靈。驗。の。著。れ。を。知。り。羽。の。光。景。成  
又。ま。あ。ふ。と。小。凡。人。と。思。ひ。と。へ。た。通。力。自。在。の。神。仙。と。や。あ。う。と。人  
某。の。足。利。累。代。の。臣。あり。願。く。此。後。隱。念。の。なり。ゆ。れ。吉。凶。い。う。め。ぬ  
からん。此。上。の。惠。も。小。未。來。の。事。を。示。し。多。人。と。懇。勤。心。同。じ。れ。ど。公。羽。へ。双。眼  
を。開。く。一。言。は。れ。回。應。し。持。初。尚。辭。を。鄙。あ。り。て。再。三。乞。け。ね。あ。と。翁  
漸。ち。眼。を。開。き。舒。ふ。云。出。る。は。この。事。天。機。を。て。漏。ら。さ。と。ん。あ。ふ  
福。ど。足。下。が。忠。信。と。ら。ふ。公。の。殊。勝。さ。ふ。其。大。い。ま。と。語。り。ゆ。さ。人。足。下。の  
今夜。こ。の。に。あ。る。も。倭。臣。は。君。を。勤。ふ。よ。り。の。され。ば。選。り。て。今。宵。此。翁。と。く  
と。君。を。さ。へ。あ。げ。る。之。一。を。耐。必。定。彼。倭。臣。此。觀。音。堂。を。被。却。せ。ん。こ。と。と。云。

勅めりて。君許容めりて十日とるまじ。此堂と毀らん。爾は附ハ先年  
 渡船上人の封じ。新田義貞主従の靈再び世の間ふ出らん。然も  
 曰く。仏縁に因られ。最期の悪念を失て世の累を脱るるべし。され  
 此人元英雄の輩なれば。生と変ても。世のあつては。どの豪傑と  
 名。天下に現るべし。その夫とて止むれば。此觀世音一回。此地方とま  
 るべ。鎌倉應護の因縁絶て。これより東國大に乱るるべし。これより天の  
 命なれば。奈何とも。淫とて。よや侮臣を。君を勅めり。この堂を破却  
 せざとも。觀音此地方は。命数なれば。いそ人間の力とて。止ん  
 足世に漏るる。ききり。あつて。秘めて。人お法を。念  
 示す。持却今夜此地方。縁故云。あてられ。深く感激し  
 尚委し。たて。教を。只今宜を。義興主従の靈ハ

何處あり生れ出らん。と。同けられ。翁近日此堂を毀てる。命と直る者  
 二人の。其一人こそ此堂を毀つ因縁。よめて。其家より生れ出づ。に  
 又今一人を近日この佛の子と授け。と祈る。母がて一女子を産べし。  
 此女兒こそ義興の再生と夫婦とるべし。又此堂を破却する二人君命  
 と。いさ。佛堂を毀てる。報めて。終つ家。も。亡る。此言  
 三。往く。その。思ひ。時刻も。後ろ。この。怨  
 縁と。いさ。怪ひ。翁が。十一の。光明。赫として。さ。あ  
 不。忽ち。一。白雲。足下。生。薄く。し。飛。り。け。  
 持却奇異の想ひ。さて。此翁こそ正しく。十一面觀世音の化現  
 といひ。我未す。示。あ。さ。あ。も。觀音。此地方。去。あ。い  
 世の間。ある。方。見。足。天の。命。し。佛の。力。及。か。に。



基氏卿の時世鎌倉  
怪異

宣ひはれの今もやうも詮さば。せめても君のほろの上を心なく  
わくまほしと再び祝音と伏拜と満兼公のほろ安全のことを深く祈る。  
心裡さうふ樂とさぞ懨として還りたる。

第二編

兩士堂を毀て神靈を走と  
二家佛を因て奇兒を産く

持朝の依りて谷を由ては所お還りける耐のさや五更近きひかりしうと  
満兼公のほろも中て持朝を俵とび多人の直ぐふほろあまのほろは佐と女  
が谷の光景とくくすまゆべと宣へお朝後で翁お遭はる首尾と詳  
あまへ上ぐるあうれども翁が人お漏しそと云はる事とば。まうさうとさう  
これの翁と恐とて秘めしうあめは満兼公のわくもあまのさあ何  
なる不思議のこととさう做しあひとや東國の乱生あんと遠慮あ

の政の満兼公その光景とまゆべと一色詮秀とらと持朝のさあ文と  
りて命せまゆべと持朝と褒賞せんと宣ひたるや詮秀お持朝の一人  
切とさうと娘と嘲笑つて云。まゆべと英口見の持朝いさお翁とあまの妖怪  
と問答さうあまゆべと思つ甲夜お度言してあまはるが事なると前言  
の面目さきに空言とさう計を翁お遭しう必定さうと狐狸の類の  
化て騙したうあまゆべと斯は妖怪のさあお制さるること社らぬは足靈なま  
庸佛なり。そのさあおのいさうと我身お悪靈とさうはるさうあまゆべと  
さう妖怪の地のおや破却して除さるれは後いさうと出さるあまゆべと  
さういさうとあまゆべとあまゆべと持朝その後をさうとさうとさうと  
討果さるとあまゆべと君のほろと輝りて怒り押へ心を静め執つお入は  
公羽のさける信臣とさう詮秀とさうとやらあらん。前言空しからと



深く感ず。かくて観音堂全れてふりてざりしと。堂亡びて東國乱  
 且んとありしこのは猿く刀の及んやと止めてふんやと詮秀が對し  
 我も武士あり。殊も君の側小侍りて流し鴻恩に蒙る。いそ臆病  
 未練をなす。虚言とりて君を欺きせし人。佐々谷の観音より先組  
 基氏との安置せし。あつと漫のふ破却せし。臣たるの道く我  
 若軍を及んより。不知の誤を改め再び観音堂のこと云へく。道  
 以ててしけれ。詮秀これとせし。顔を朱く成青くあり。大お怒り声  
 勵してさうりけり。足下羊駝の才と。頭くくる某。對ひこれの一言奇怪  
 我言とて。怒りて。武士のさうひ。生場を去るに奈何とも。做を  
 ぶれを力とりて。吐く。と想へる。さうぐの言を速く我は唇を

嗟臆病未練の白痴と。めく。罵り。朝と。血氣の持初め。怒氣  
 と。忍ぶ。之。き。顔。色。朱。と。灌。ぎ。こ。さ。る。ぐ。さ。と。變。じ。急。然。と。て。声。を。勵。し。臆病  
 未練の白痴と。毎れの過言免さし。と。刀の柄。手。か。か。り。詮秀も  
 膝。を。垂。し。刀の。燭。天。さ。ぬ。あ。既。お。事。お。及。ん。と。その。肘。側。に。候。ひ。る  
 人。く。慌。忙。急。せ。二。人。を。居。間。の。御。前。より。尾。筋。な。せ。と。制。する。満。兼  
 公。も。然。る。も。に。二。人。を。勸。解。多。あ。ぞ。互。お。公。の。解。され。と。君。の。命。せ。の。重  
 けれ。は。深。ひ。つ。も。女。人。の。辭。し。として。ま。う。て。り。且。流。詮。秀。は。右。軍。の。持。初  
 小。辱。せ。め。られ。は。る。こと。を。あ。き。ま。す。り。彼。が。云。う。わ。し。て。観。音。堂。を。その。ま。に  
 置。て。は。我。持。威。衰。へ。んと。これ。より。君。く。と。巧。言。か。し。て。観。音。堂。を。破。却。せ。ん  
 こと。を。君。小。切。め。り。満。兼。公。は。羊。駝。は。は。ち。せ。り。詮。秀。が。言。や。感。心。ひ。多。し  
 殊。に。観。音。堂。を。毀。し。め。り。と。お。は。し。執。事。家。次。安。房。も。憲。定。公。に。く。

前夜あらぐのこものりしと。詮秀怪談を做折る。光物此のほろ梅はる  
けり。其出る処は紅さへ結城持胡と依く女う谷おまのうまふ  
怪しき。お達あらぐの事云々へはる。且詮秀持胡争ひのこ細事  
み命は。ひかほ妖魔の佛堂をのさ。置入ハ我武威のなる。何れが  
をや破却して。そと除く。と命多ひ。これの憲定。路をひて。下けられた。  
君ハ知ら。めさ。ば。佐く女う谷の記。ある堂ハ當初祖父君基氏ハ謙念安  
全に。行の。為。友。は。遊。行。る。の。渡。船。上。人。て。仇。敵。の。怨。霊。を。討。た。封。じ。ま。り。  
此堂あり。さる縁故あり。と。さるお毀らる。と。然らうもの。と。執り思  
つた。多し。お。會。と。美。る。も。畢竟詮秀が。より。怪談。を。か。せ。より。奔  
る。其。身。に。近。習。の。人。と。い。う。て。足。非。と。弁。さ。る。既ハ怪力乱神と。語。る。と。  
と。い。ふ。教。も。の。り。嗟。の。ね。一。色。が。あ。る。と。い。う。と。嘆息。され。満。兼。の。執。事

の凍。さる。こと。つ。ぎ。此。事。既。世。お。公。み。な。れ。り。さ。る。女。その。ま。に。捨。棄。  
ハ。別。の。人。く。我。不。武。と。謾。り。命。を。用。ひ。さ。る。お。至。る。が。い。う。女。後。領。の。任。る。  
を。た。我。詮。秀。が。言。と。秘。して。祖父。君。の。建。立。も。ひ。つ。る。此。堂。と。い。う。て。毀。ん。や。  
た。後。領。の。職。が。失。る。と。想。う。が。故。なり。尚。是。も。て。も。執。る。止。る。や。  
不。言。と。宣。う。と。お。憲。定。君。詮。秀。が。言。を。信。じ。ま。る。お。誅。止。る。と。い。う。を。察。  
此。回。の。事。ハ。さ。る。中。な。れ。ハ。世。の。害。ハ。お。の。ま。じ。と。終。り。其。命。ハ。從。ひ。  
う。ば。満。兼。を。殺。し。ひ。ひ。彼。佛。堂。を。毀。ん。ち。行。の。誰。う。か。ん。と。商。議。  
ま。る。お。小。栗。孫。五。郎。満。重。名。武。常。陸。今。篤。光。を。殺。す。と。然。ら。う。と。い。う。と。す。に。  
さ。る。お。お。と。入。と。兩人。を。お。い。れ。る。小。栗。孫。五。郎。満。重。と。い。う。ハ。常。陸。國。  
の。住。人。也。其。遠。祖。ハ。葛。原。親。王。四。代。の。孫。常。陸。大。掾。國。香。の。子。小。栗。次。郎。  
より。八。代。の。孫。國。重。を。薩。の。國。小。栗。村。お。住。て。より。代。く。源。家。ハ。勲。功。あり。

孰中満重が父重躬足利尊氏公に属して功ありけり。多くは庄園と傍  
 堀の邊倉の邊に基氏公の旗下に属さる。夫より今の満重其妻  
 と嗣て管領に仕ゆ。他事は又名武常陸公篤光と云く。ハロモ  
 常陸國の住人にて清和源氏の鹿流新羅之郎義光の後胤なり。此二人  
 相もふ心質直萬賢きものなり。されば同氣相求むとて伺候の侍多  
 かる中にも小栗と名武といふと親しく交る。今日も名武篤光小栗  
 満重がりとふまの多し。物語してあり。君より俄のに召有る。ふ  
 こい何事やと不審。二入り連管領のに之を承りし。は前より召  
 出され。君自ら宣さる。此頃佐々木谷の親音堂。小栗怪住り。父に也  
 及びれは。ふ汝二人彼ふ。速に彼堂を破却し。妖物を驅拂ふ。し  
 と命合め。ふは名武篤光。年四十五。近れ。一子なれ。と嘆。此女が

谷の親音。祈拵。子と授。人にて。妖類。折られ。大き。驚。はる。は  
 彼。堂。基氏公の。建。立。て。靈。驗。と。著。小。臣。も。平。日。兼。龜。仕。り  
 け。れ。と。嘗。て。妖。怪。と。し。も。し。ま。も。及。び。と。ん。こ。い。流。言。の。虚。言。と。お。り。い。は。に。は  
 小。堂。み。ど。り。の。毀。ち。多。り。事。い。う。ゆ。ゆ。と。父。え。上。り。れ。満。兼。公。は。氣。色  
 換。て。我。慢。再。流。言。を。信。じ。故。め。る。堂。を。毀。ん。や。深。き。所。存。あ。り。て。汝。も。命。じ  
 破。却。せ。ん。と。と。然。る。汝。我。命。を。乖。れ。家。右。手。な。る。を。漫。り。て。の。故。る。人  
 あり。今。汝。を。用。ゆ。ま。じ。外。人。と。撰。ん。で。破。却。さ。と。と。念。然。と。して。宣。さ  
 る。篤。光。大。き。も。恐。れ。君。の。公。既。に。変。せ。り。若。他。人。の。命。換。れ。ハ。口。惜。し。事。之  
 且。ハ。親。音。の。さ。る。像。失。り。の。ゆ。ゆ。と。畏。ろ。も。真。加。る。し。と。心。の。裡。に。念。し。命。の  
 逆。ひ。罪。が。つ。び。只。願。前。の。命。を。乞。へ。満。兼。公。中。や。く。小。栗。と。云。ふ。事。ひ  
 その。乞。ふ。事。し。る。ふ。且。説。二。人。を。管。領。満。兼。公。の。命。を。蒙。り。即。日。人。吏。と。信。し

十栗名武  
甲と奉して  
佛堂を  
毀ち  
神霊を  
走らす



十栗名武

十栗名武

名武篤光

十栗満重

佐々木谷ふ心死にれ名武篤光の素よりこの記世昔と信にせられの蜜ふ  
小栗満重よ云々えおのれる像とより其後其堂破却され処母  
堂の下に方一丈むりなる平めの大石あり二人煙と人夫とて土を拂  
かへんふ十六の眞字を彫はけり。

法室寓居 惟四十年 常陽二子 應鈔仏縁

といふ文字なり名武篤光これと着て大母驚た小栗は對ひこの堂  
當初渡松上人新田我眞の靈火燃せし一丈とせふ此文字の終上人  
既小今日のことを知り却て書はけるやん我眞の討死の延文四年なり  
それより今應永六年まで指と屈て数あり正しく四十年なり常陽  
二子と云足下も其由もよむ陸の任人なれば二人がとあるや應鈔佛  
縁といふること其公解にがじとありたれ小栗も実爾あるん

されふよんで足と思へ此石の下ふこそ我眞等の靈を封せし處なる  
る一既小佛堂を破却しければ是則佛縁を断するの語ふありと云ふ  
名武大よさより四十年前今日我々此堂を破却するを知りしや渡松  
上人の神通感する小堪きりかて此石を除去こそよけと人夫と勵  
まし彼石を扛まふ志しる小其庭中一箇の穴あり深き我尋ありと知り  
かじこのいふ事と篤光満重の二人を寄る穴の行を記き定規あり怪し  
穴庭刮刺と管と云にしく一道の黒氣滾起半天の有りしが忽ち空中  
うて散り十一の金光四方に飛去失ふなり是則新田我眞をとりぬ十人  
の従士れ靈今日出世して英雄小栗助重君となり美名を顕するさま  
兆と云后もぞ思ひ知る事多し満重も篤光もかれ不思議と目前も着  
奇異の志ひ心酔うごとく夢付不居りしがかても果る事ありぬ

人夫も下知し破却する堂の枝木を積りて一片の煙にして十六字成  
 彫し石板と車と牽し管領の山所ふ糸の首尾の光景を詳し父へ上り  
 石板を君の御殿に傳へしは後兼公これと見出しその物語は父も母  
 實由の佛堂を破却さしけることの詮なりと悔おぼせども既に事果  
 ねれば念ともはがく小栗名武の勞と賞り多むは斯くも左兵衛佐  
 殿ハハハ例あらざればとひきこめりおとしは近習の外を法對面もは  
 其うちも一色詮秀只顧ハ例は去るに折る人と退けハ蜜法とす  
 維あつては事を知るのよし志うるふは年の十月氣紫の大内左京  
 權大夫義弘逆心成て泉別境に播磨の土波宮門少輔詮直を義弘に  
 一味し足徳國長森の城をたて籠居て京都に軍をこし及むと早く  
 征伐せむといひし大内及人と自ら八幡山に出陣し夫々兵を分  
 ちて伐しあふ義弘も詮直も亡び失ふる是ハ大内義弘  
 將軍家と怨みなることありて鎌倉後と絡むに此及逆成るなり一味  
 せし首尾ハ一色詮秀の謀とありしと左兵衛佐満兼公も同年  
 十月一万余騎を卒し多し鎌倉と打立ふ外ハ京都に軍家の加勢を  
 披露しけれと至實ハ一色詮直が長森の城と後結して寄るも退散し  
 其勢ひも乗し徑に京都に責登り將軍討ちたり天下に傾げんとす度  
 かりしが大内義弘も土波詮直も亡び失ふけりとすえし左兵衛佐殿ハ  
 本意なりと鎌倉への還りありて武州の府中へ還りし多し其の事  
 誰いとなし佐兵衛佐殿ハ謀及のす只敵を同聲へしは鎌倉の  
 執事家持憲直されは怒り内へ誅せりし左兵衛佐殿も夢の破る  
 うとく後悔もあつと大に形ふは京都に軍家をてハ鎌倉後逆公

あつはし。まき。めし。ち。及。され。満。倉。京。都。及。く。と。わ。ふ。の。り。天。下。の。大。子。也。  
ちんびん。まう。と。えん。す。行。要。あ。れ。と。多。く。評。議。あ。つ。て。軍。家。よ。り。満。倉。へ。の。教。去。り。下。し。  
や。り。あ。り。の。せ。り。と。ま。ハ。満。倉。と。案。外。相。違。い。大。に。去。り。深。く。將。軍。家。の。恩。  
と。感。謝。し。翌。年。の。三。月。武。州。府。中。と。立。て。満。倉。を。ゆ。り。と。ま。ふ。左。兵。衛。佐。満。倉。と。  
満。倉。の。後。領。あ。つ。て。富。貴。も。も。に。保。ち。何。不。足。な。れ。ゆ。え。あ。つ。て。か。は。企。と。ら。は。し。  
あ。つ。と。い。と。怪。し。く。も。不。思。議。の。事。と。此。後。同。年。九。月。奥。州。の。宇。都。宮。氏。度。  
孫。友。一。同。き。九。年。の。春。あ。つ。て。奥。州。榑。大。膳。左。入。道。管。領。の。命。以。叛。き。新。田。  
義。則。満。倉。と。寇。と。此。時。八。州。の。ち。新。田。の。侮。亂。と。ま。し。盜。賊。蜂。起。さ。る。中。  
多。く。し。く。と。或。ハ。討。と。或。と。降。参。り。て。満。倉。と。傾。け。ま。う。て。な。り。し。か。同。じ。き。  
十。四。年。の。八。月。九。九。日。の。夜。後。領。の。伊。所。回。録。お。及。び。な。れ。ば。満。倉。と。幸。ら。し。て。  
伊。所。回。録。逃。走。出。る。以。完。戸。を。江。入。道。の。敵。お。入。ま。ひ。ぬ。か。れ。ば。君。と。し。め。諸。臣。

世。の。あ。つ。み。易。れ。ゆ。も。な。り。け。り。是。正。く。結。城。技。胡。と。示。し。け。る。公。相。が。言。爰。よ。  
慈。心。の。不。在。話。下。且。況。小。栗。孫。五。郎。満。重。ハ。今。年。四。十。に。近。け。り。一。子。と。  
も。形。く。未。頼。ま。く。想。ひ。に。慈。水。六。年。の。冬。北。頃。より。妻。あ。り。な。れ。初。瀬。と。な。り。  
あ。つ。と。ぬ。牙。と。好。り。け。る。あ。つ。て。満。重。が。去。り。大。う。と。な。り。安。産。あ。じ。く。く。神。と。伝。  
お。祈。し。其。後。あ。つ。て。同。七。年。の。夏。の。末。い。と。安。く。け。く。王。の。ご。と。れ。男。兒。と。産。り。し。  
か。が。夫。の。名。を。去。り。た。ら。ひ。う。り。堂。中。の。玉。挿。の。氣。と。愛。慕。し。み。な。り。名。を。小。次。郎。  
と。そ。呼。ぶ。り。此。兒。成。生。し。隨。ひ。教。養。せ。ら。る。心。さ。か。み。人。賢。く。父。母。お。孝。也。  
あ。つ。て。去。り。み。物。か。く。と。う。り。弓。矢。馬。お。踏。り。太。刀。合。の。業。お。至。り。ま。す。く。年。  
あ。つ。と。の。あ。つ。て。て。な。け。れ。ば。父。母。の。ご。と。ろ。な。さ。う。も。云。つ。て。一。門。他。門。の。人。も。賞。  
讃。せ。ら。る。か。り。り。是。佐。女。谷。あ。つ。て。十。一。道。の。光。物。四。方。お。散。乱。せ。ら。る。  
今。こ。ろ。に。其。一。生。れ。知。ら。る。り。此。兒。后。小。栗。判。官。助。重。と。な。り。英。名。と。顯。り。世。





新田義興  
の霊

栗かぶ  
再生を

栗判官代  
助重是也

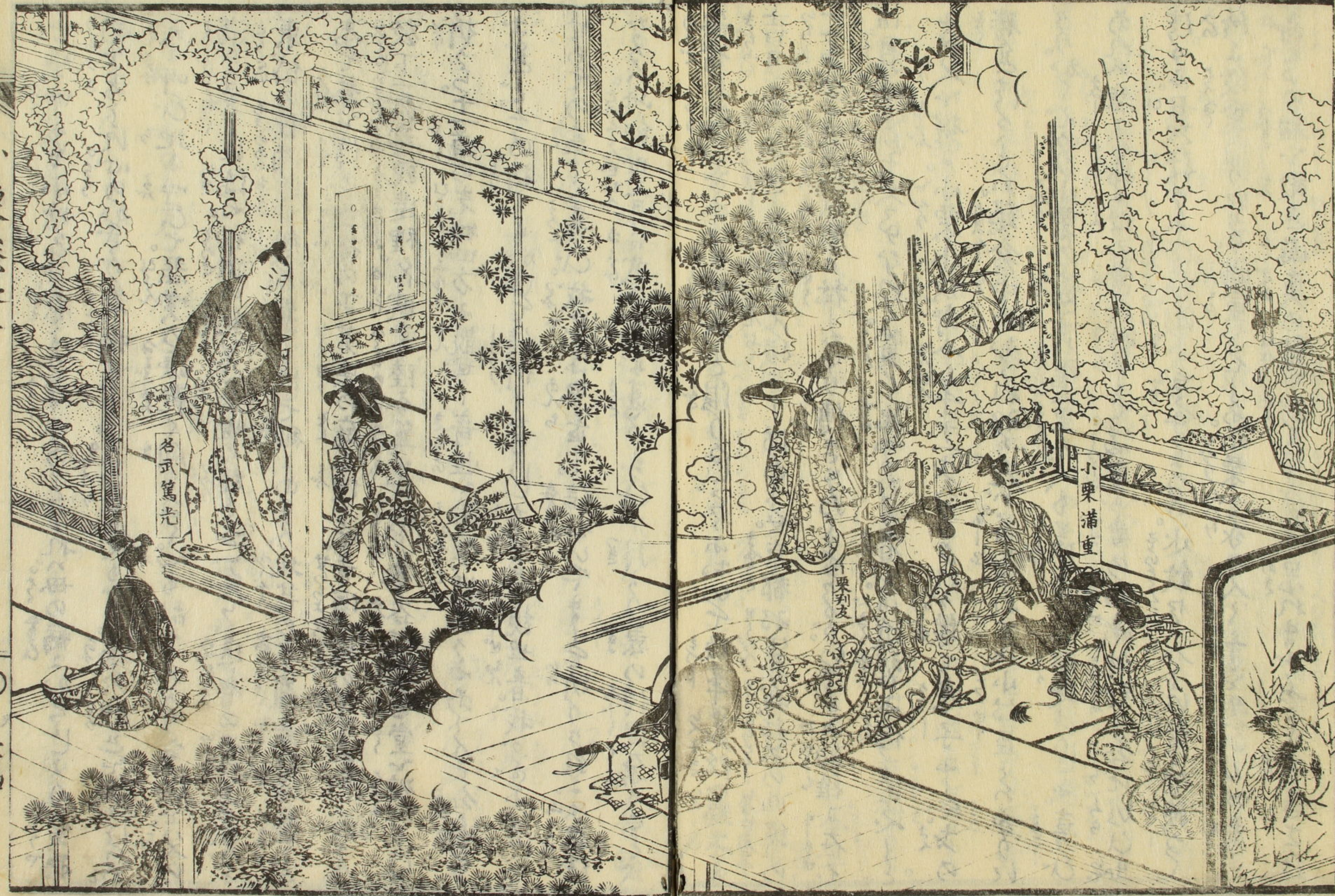
栗判官代  
助重是也

圓通佛

名武  
一女子

搜く

無天姫  
是也



名武篤光

小栗満重

小栗判友

新田義興

栗判官代

小栗判官代

それの中も小次郎の原より孝子のことなれば母の病もかたじけなく置け  
 側を去る心のかぎり着病せしごと其甲斐もなから永れ別をばはれば  
 天を叫び地を呼びて悲嘆の涙乾く間もかく心も乱るをりありしと父の  
 満きまに流る初瀬の死と茶毗の煙とほしとて送葬の宮とるごころ  
 東岱の秋雨涙と綴り思ふとして袖のあまの北芒の冬嵐音は添無きと  
 志て慈と傳きて白揚の下芝壤の庭も埋て青塚一塊の主とあまにり  
 放下一匹却説這裡名武常陸分篤光へ依り女谷れ祝書堂を破却し  
 折ら十道の光物四方ふ散せ一奇怪と着冥罰いりあんと公樂ま  
 ざるその折もかぎり信仰しなりし存書の親世昔我がふいしと  
 せめての幸と喜び我家ふ安直し信をりやまを祈りて終る不思議  
 なる此親世昔名武の家もすりあり一月より妻の侍従あること

おほえ々おほえ々夫婦原身親世昔小子祈りてせしなれば感喜斜  
 まるはこれらんまじく伊佛の眞助寧かたね験ありと月のほゆる  
 待ふ音光と易く其年もある明の應永七年は夏の未玉欺くむらて  
 なる女児を産りては是小栗小次郎が生る下月と同じ結城侍朝  
 告しおほえ言ふ小強ゆりる光夫娘へ乞や菩薩の授けあふなれ  
 ば我子なりとて疎まるとぐとと寵愛とること譬あつ小物ははげり  
 ろく美しく邊りも照り赫くげりりおればとて照天娘とぞ呼びあせり  
 生長おほえうひ天質の敷色も古の衣通姫小町さんともおやあり  
 らんとおほえうひ才女勝色て女子は為業としくおほえうひなく手  
 書讀ことなんどらううくに青書生よりもおほえうひ父母は是や親世昔  
 の化身とやあんとぞらめとらうく慈愛おほえうひはけてもあられよれ

女むすめ婿むすめもまと想入いれと録倉くら中なかにこれぞとおふ人もならば近ちか日ひ鎌かま倉くら中なかにおて  
 小栗おぐり小次郎おぐりの才貌ぶたうのとれい次つぎ渡わたりけしうば馬光まひかりあまりふこう後ごはき  
 折おりもあらふ小栗おぐり満まん重じゆうようあらふとえなやと妻つまもそのより次中なかへえ知しらぬはら  
 こよなくぢぢび奴亦またもかねで甬しゆう想むひとのねとあらふおんもも其その公こうのは  
 満まん重じゆうおの遭あひなぶ此この事こと云いひしとその時とそを行まらりひの意永えい十じゅう八はち年ねん  
 の春のりしが名な武ぶの光が前裁ざいおの名な光こうの機ありしるも光こうのは小栗おぐりと  
 其そののまに春の行樂らくとまけらるが今こと年ねんも既に其とらふらりしるを招まねくや  
 と思ひ折らる小栗おぐりがりとより使してやにしらるは此この後ご息いきあての小次郎おぐり  
 公地こうち惱なうましく川菴せんアのひけらるがらまりふ心屈くつといふ辭散さんの為に庭  
 の糸一いつ見けんさしきらふひは免されば世よがからぬ明日あしたは俱にやさし人ひとと有らるおの  
 馬うま光まひかりはまりのけられ折らるがらこのより車くるまとおぎらうらくよらるとび郎らう君きみ乃の

此このいまの夢むらりも存ぞんぜどは伊跡せきをお過とはるこのいまもかとい何なに  
 若わかくくいふん明日あしたととくよりはまらりの人ひとといと懸懸けんお回應おうとらす使へ  
 其そのこう後ごはきらる急いそひでこの罪つみのさらします

結むす 小栗外傳卷之一 畢

